

2013 未来をつなぐ・北部九州総体レポート

「吹きわたれ若人の風北部九州へ」

全国高等学校体育連盟テニス専門部

常任委員 内藤 美明

〈はじめに〉

未来をつなぐ北部九州総体は、39年振りに福岡県で開催されました。福岡県営春日公園テニスコートと東平尾公園博多の森テニス競技場の2会場での開催。春の全国選抜高校テニス大会も同じ、東平尾公園博多の森テニス競技場で行われているので、福岡県の先生方・補助員の高校生達が、全国選抜高校テニス大会とは違う、インターハイを作り上げるのだという思いを込めて、大会がスタートしました。

〈開会式〉

春日市クローバープラザで行われた開会式では、前年度優勝旗・優勝杯の返還の後、筑陽学園高等学校、宮本航輔・福岡大学附属若葉高等学校、古賀加純両選手が選手宣誓を行った。大会が開催されることを感謝する言葉で始まった宣誓内容は、2人の次の言葉によって締めくくられた。「我々選手一同は、たくさんの人々が私達を支え、成長させてくださったことへの感謝の気持ちと、福岡という素晴らしい舞台でテニスができるという誇りを胸に、最後まで諦めず、正々堂々と、そして熱烈峻厳に戦うことを誓います。」

式の前後に行われた、福岡県立春日高等学校吹奏楽部による歓迎演奏、玄界高等学校邦楽部の和太鼓の演奏も会場の雰囲気を大いに盛り上げ、参加校の翌日からの試合にかける思いを後押しした。



〈団体戦〉

男子ベスト8は次の学校。

相生学院（兵庫）、筑陽学園（福岡）、清風（大阪）、四日市工（三重）、湘南工大附（神奈川）、浜松市立（静岡）、秀明英光（埼玉）、柳川（福岡）。

地元福岡県の筑陽学園が第8シードの関西（岡山）に勝って、初のベスト8に入りました。そして、もう1つの地元校、選抜大会準優勝、今大会第2シードの柳川が準々決勝で秀明英光に敗れるという波乱がありました。残りの枠は、相生学院、清風、湘南工大附が準決勝に駒を進めました。



準決勝、朝からの雷雨。試合は、開始時間を30分遅らせて、9時30分から室内コート4面を使用して、1面進行で行われました。

相生学院対清風。近畿地区大会決勝と同じカードとなった対戦は、ダブルス飯島・加藤（相生学院）対矢多・望月（清風）は、6-3、6-1で相生学院。シングルス1竹元（相生学院）は、上杉（清風）にファーストセット6-1。しかし、セカンドセットの途中から、上杉のショットが冴えわたり、6-3。ファイナルセットも勢いが止まらず、6-0で上杉が勝ち、勝負の行方はシングルス2へ。田沼（相生学院）は坂井（清風）にファーストセットをタイブレークで落としましたが、セカンドセットは6-2で取り返し、ファイナルセットへ。6-5でマッチポイント。そこで坂井が痛恨のダブルフォールト。1面進行の為、9時30分に始まった試合。勝負が決まったのが、16時14分。7時間にわたる熱い戦いでした。

湘南工大附対秀明英光。ダブルス沼尻・岩崎（湘南工大附）対橋本・千葉（秀明英光）は、元気あるプレーで勢いを最後まで持続した沼尻・岩崎が6-4、6-4で勝利。シングルス1、1年生エース高橋（湘南工大附）対今大会男子シングルス第1シード三好（秀明英光）は、一方的な試合で高橋が6-1、6-1で勝利し、決勝進出。

朝からの雷雨がやっとおさまり、1番コートから3番コートで17時から相生学院対湘南工大附の決勝戦が3面進行で行われました。まず、ポイントを上げたのはシングルス1の高橋（湘南工大附）。竹元（相生学院）とのNo1対決は、一方的な試合で、高橋が疲れの残っている竹元に6-1、6-2で勝利。ダブルス沼尻・岩崎（湘南工大附）対田沼・飯島（相生学院）。準決勝、シングルス2で3時間の熱戦をものにした田沼がダブルスに出場。しかし、疲労が残っているのか、動きにキレが無く、ファーストセット0-6で落としてしまいました。セカンドセットに入り、本来の姿を取り戻した田沼が・飯島が6-4で取り、ファイナルセットへ。ファイナルセット5-5。沼尻・岩崎がサーブをブレイクして6-5アップ。そして、サーブをキープして7-5。5年振り4回目の優勝。



女子ベスト8は次の学校。

富士見丘（東京）、仁愛女子（福井）、浜松市立（静岡）、名経大高蔵（愛知）、相生学院（兵庫）、早稲田実業（東京）、九州文化学園（長崎）、京都外大西（京都）。

順当に勝ち進んだ3つのシード校と昨年ノーシードから準優勝し、今年も第3シード相生学院を破った早稲田実業がベスト4に入った。

準決勝、富士見丘対名経大高蔵。ダブルス江見・杉本（富士見丘）対宮田・林（名経大高蔵）の試合は、ファーストセット1-4から逆転の7-6（7-5）で宮田・林が取りました。セカンドセットは6-4で江見・杉本が取り、勝負の行方はファイナルセットへ。ファイナルセットは、ショットが冴えわたった江見・杉本が6-1で勝利。シングルス1細沼（富士見丘）対大矢（名経大高蔵）は、連覇への気合いの入った細沼が6-3、6-4で勝利しました。

早稲田実業対京都外大西。ダブルス金井・剣持（早稲田実業）対小山・木村（京都外大西）の試合は、気合いと気合いのぶつかり合いで、一進一退の6-4、4-6。ファイナルセットも6-4で金井・剣持が勝利。3時間20分の戦いでした。シングルス1辻（早稲田実業）対今大会女子シングルス第1シード村瀬（京都外大西）。辻、5-4でファーストセット王手。しかし、逆に5-6とされましたが、バックハンドのストレートが決まり、タイブレークへ。タイブレークの1本目、強気で勝負した村瀬が取り、そのまま7-0でファーストセットを取りました。シングルス2大石（早稲田実業）対三輪（京都外大西）。ファーストセット6-2で大石が取りました。しかし、セカンドセットに入り、三輪の強気のショットが決まり始め、6-2。そして、勢いは止まらず、ファイナルセット6-1。シングルス1、辻のバックハンドのストレートが決まり始め、セカンドセットを6-2で取り、ファイナルセットへ。その時、シングルス2の決着が着き、ポイント1-1。ファイナルセット、辻の動きが悪くなり、村瀬、3-0リード。最後は、村瀬のボールがネットイン。決勝へ駒を進めました。

決勝戦は、4連覇を目指す富士見丘対京都外大西の顔合わせとなりました。気迫とストロークの安定感で上回る富士見丘がシングルス2つを取り、4連覇を達成しました。シングルス1は細沼6-1、7-5村瀬、シングルス2は森崎6-3、6-0三輪、ダブルスは江見・杉本6-4、4-5（打ち切り）でした。富士見丘は、来年、東京インターハイで女子団体の新記録、5連覇を地元東京で達成するという夢の実現に向かっての優勝でした。



〈個人戦・シングルス〉

男子ベスト8は、次の選手。丸数字は学年。

太田悠介③（静岡・浜松市立）、徳田廉大①（神奈川・湘南工大附）、沼尻啓介③（神奈川・湘南工大附）、河野優平③（福岡・柳川）、中井雄也③（大分・大分舞鶴）、上杉海斗③（大阪・清風）、石井行③（東京・東海大菅生）、竹元佑亮③（兵庫・相生学院）。

関東3名、近畿2名、九州2名、東海1名であり、3年生が7名、1年生が1名、シードダウンが相次ぐ中、ノーシードから混戦を勝ち上がって来た選手の活躍が光った。

US オープン Jr に出場する、第1シード三好健太（埼玉・秀明英光）が、1回戦で敗れ、シードダウンの相次ぐ大混戦の中、決勝に駒を進めたのは、準決勝で第4シード河野優平に勝った、団体戦優勝、湘南工大附のシングルス2、徳田廉大。そして、準決勝で第2シード竹元佑亮に勝った、第6シード上杉海斗の決勝戦は、上杉からファースト6-3、セカンドセット4-0のリード。そこから徳田が粘りのストロークで、セカンドセット7-5。ファイナルセットは、反対に徳田のショットが冴えわたり6-1。ノーシードからの快進撃で、平成4年鈴木貴男以来の1年生チャンピオンの誕生。



女子ベスト8は、次の選手。

首藤みさき③（大阪・城南学園）、牛島里咲②（長野・地球環境）、江見優生乃③（東京・富士見丘）、齋藤佳帆②（千葉・拓殖大学紅陵）、森崎可南子②（東京・富士見丘）、江代純菜③（長崎・九州文化学園）、押野紗穂②（茨城・東風）、細沼千紗③（東京・富士見丘）。

関東5名、近畿1名、北信越1名、九州1名。女子もシードダウンが相次ぐ中、関東勢、特に富士見丘3名の活躍が光った。



シードダウンが相次ぐ大混戦の中、第8シード牛島里咲と第2シード細沼千紗の決勝戦は、ファーストセット、細沼が力強いストロークで6-3。セカンドセットに入り、細沼の力強いストロークにテンポの合い始めた牛島のストロークが勝ち、6-3。ファイナルセットも牛島のテンポの速いストロークが冴えわたり、6-3。シードダウンの相次ぐ大混戦を勢いに乗る2年生が制しました。



〈個人戦・ダブルス〉

男子ベスト4は、次の選手。

沼尻啓介③岩崎歩③（神奈川・湘南工大附）、望月勇希①坂井②（大阪・清風）、寒川雄太③白井裕都③（香川・高松南）、上杉海斗③矢多弘樹③（大阪・清風）。



決勝は、平成18年神戸インターハイ以来の同校対決。望月・坂井ペアと上杉・矢多ペア。午前中に行われたシングルス決勝で、逆転負けを喫してしまった上杉が、気迫のこもったプレーでファーストセット6-3。セカンドセットも2人のコンビネーションプレーが冴えわたり、6-3。3年生同士の先輩ペアの優勝。



女子ベスト4は、次の選手。

細沼千紗③江見優生乃③（東京・富士見丘）、竹浪史華③岩下美穂②（岡山・岡山学芸館）、首藤みさき③井上鈴袈③（大阪・城南学園）、西口真央③上唯希（兵庫・園田学園）。決勝に進出したのは、細沼・江見ペアと西口・上ペア。全国優勝を幾度となく経験している兵庫県の名門、園田学園からは、今大会、女子ダブルスで1ペアだけの出場。その思いのこもったプレーでファーストセット6-3。しかし、セカンド



セットは、午前中に行われたシングルス決勝で、逆転負けを喫してしまった細沼が気迫のこもったプレーで、6-3で取り返し、ファイナルセットへ。ファイナルセットも4-3リード。6回目のデュース。細沼のポーチが無情にもアウト。このゲームを西口・上が取って2-4から4-4に迫り着き、次のゲームも取って5-4の逆転でマッチゲーム。富士見丘のサービスゲーム、15-40。園田学園のマッチポイント。そこで、サーバー江見が痛恨のダブルフォールト。呆然とする江見。ネット際で首を項垂れる細沼。対照的に抱き合っって喜ぶ西口・上。熱い7日間の最後のポイントでした。



〈おわりに〉

団体戦最終日、朝から雷雨。アウトコートは、プール状態。天気予報では、午後3時頃まで大雨。通常の大会であれば、延期もやむをえない状況の中。急遽、室内コート4面での準決勝、1面進行。8時30分に試合進行の決定。9時30分試合開始。たった1時間で全ての用意をして頂いた、福岡県の先生方と補助員の高校生達の献身的な努力で始まった準決勝。今まで経験したことのない準決勝。試合終了時刻、16時14分、7時間14分の熱い戦い。45分の休憩で、17時、決勝戦開始。ナイターでの決勝戦。個人戦に入って、連日、35度を超える猛暑の中、戦う選手、監督、応援の方々、そして、福岡県の運営の先生方と補助員の高校生達。みんなで作り上げたインターハイ。春の全国選抜高校テニス大会と同じ会場。しかし、とても素晴らしい違った顔を見せて頂いた大会でした。

大会に関係して頂いた方々へ感謝の意を表したい、そして、来年は、東京インターハイ、日本のテニスの聖地、有明テニスセンターでのインターハイ。今年も福岡発世界行き。来年は、東京発いや、日本発世界行き、そのような高校生達の戦いに成ることを願って、レポートを閉じることに致します。

